

平成25年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成25年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 サワラ

学名 *Scomberomorus niphonius*

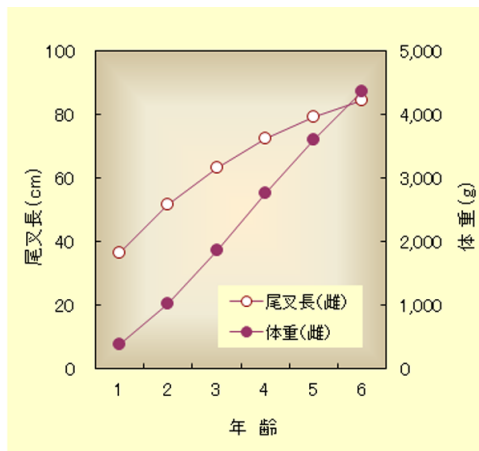
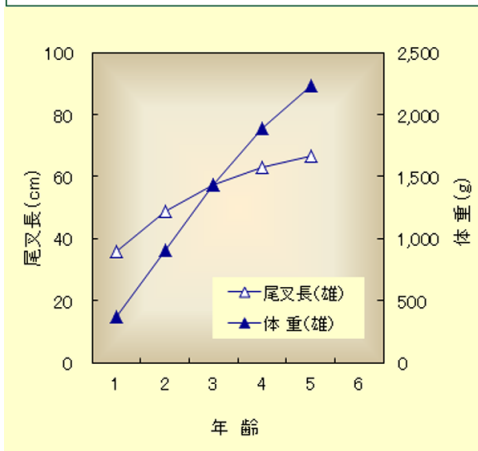
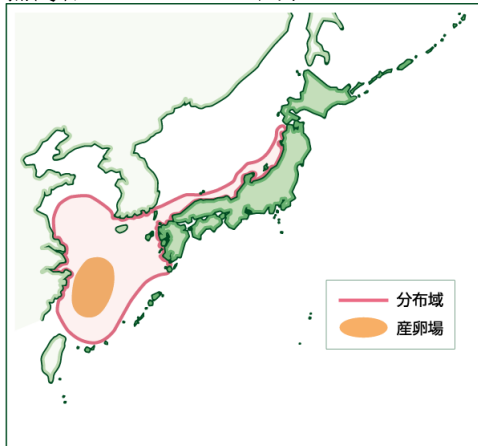
系群名 東シナ海系群

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 約6歳
成熟開始年齢: 1歳(一部)、2歳(大部分)
産卵期・産卵場: 3～6月に産卵、産卵場は東シナ海の中央部～中国沿岸
索餌期・索餌場: 夏～秋季、黄海・渤海、日本海など
食性: 稚魚期以降に魚食性
捕食者: 不明

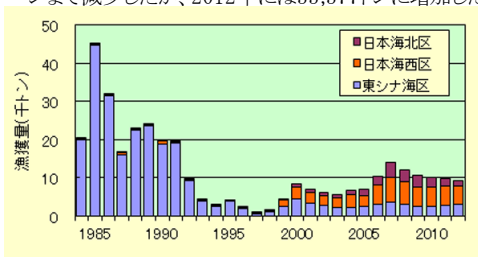


漁業の特徴

1990年代半ばまで、サワラ東シナ海系群の日本の漁獲量の大半は、東シナ海の大中型まき網によるものであった。しかし2000年以降では、本系群の漁獲量全体に占める東シナ海の大中型まき網による漁獲量の割合は低下し、日本海の定置網による漁獲量の割合が増加している。日本海における漁獲量が全体に占める割合は、2003年以降は60%以上を維持している。

漁獲の動向

日本の漁獲量は1984～1991年は2万トン前後で推移していたが、1992年以降に急減して、1997年には822トンまで落ち込んだ。1998年以降は、日本海における漁獲量が増加し、2007年には近年における最高値を示した。2008年以降は減少傾向にあり、2012年は9,209トンであった。韓国の漁獲量は、2007年の42,199トンから2011年の29,294トンまで減少したが、2012年には33,377トンに増加した。



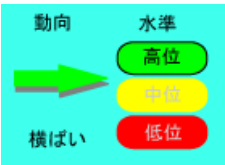
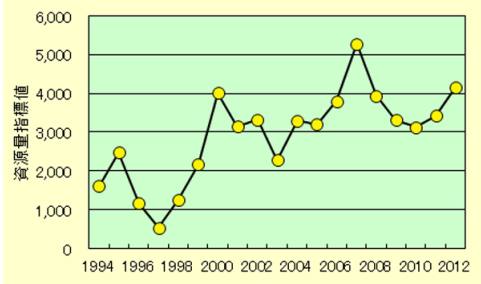
資源評価法

日本の漁獲量、東シナ海で操業する日本の大中小型まき網のCPUE(漁獲量/有効努力量)、および韓国の漁獲量の相乗平均値を、資源量の増減を示す資源量指標値と考え、これらの情報に基づいて資源評価を行った。大中小型まき網により九州主要港に水揚げされたサワラの体重別漁獲尾数、日本海の定置網により漁獲されたサワラの尾叉長組成は得られたが、コホート解析による資源量推定は行わず、これらの情報は参考にとどめた。

資源状態

2012年におけるサワラ東シナ海系群の資源水準は、過去29年間(1984～2012年)における日本と韓国の合計漁獲量の最少および最大値の間を三分した基準値に基づいて、2011年の中位から高位へ上昇したと判断した。また、

最近5年間(2008～2012年)における資源量指標値は、2010年を境に減少傾向から増加傾向転じたため、資源動向は横ばいと判断した。東シナ海における大中型まき網や日本海における定置網の漁獲物の大半は、1歳以下の若齢魚である。



管理方策

資源水準が高位にあり、資源動向が横ばいであるため、資源状態に合わせて漁獲することが望ましい。ただし、東シナ海大中型まき網や日本海の定置網による漁獲物の主体が若齢魚に集中していることから、資源量指標値の変動傾向を注視する必要がある。

	2014年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	105百トン	$1.0 \cdot C_{2012} \cdot 1.14$	—	—
ABCtarget	84百トン	$0.8 \cdot 1.0 \cdot C_{2012} \cdot 1.14$	—	—

- 日本漁業に対する値
- 平成25年度ABC算定規則に基づいて、 $ABClimit = \delta_1 \cdot Ct \cdot \gamma_1$ 、 $ABCtarget = ABClimit \cdot \alpha$ で計算した
- γ_1 は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/l)$ で計算をし、 k は係数(標準値の1.0)、 b と l は資源量指標値の傾きと平均値(直近3年間)である
- δ_1 は高位水準の標準値を使用した

資源評価のまとめ

- 日本の漁獲量、大中型まき網のCPUEおよび韓国の漁獲量の相乗平均値を資源量指標値として、これらの情報に基づいて資源評価を行った
- 資源水準・動向は高位・横ばい
- 漁獲の主体は1歳以下の若齢魚

管理方策のまとめ

- 資源水準・動向は高位・横ばいであるため、資源状態に合わせて漁獲することが望ましい
- 東シナ海および日本海における資源状態の正確な把握や資源管理には、関係国間の協力が必要である
- 2歳魚の大部分は成熟するが、漁獲の主体は0歳と1歳であるため、若齢魚の保護も考慮すべきである

執筆者: 高橋素光・塚本洋一・由上龍嗣

資源評価は毎年更新されます。